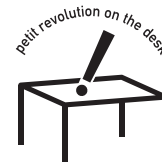




Vol.56

机の上の小さな変革



意味の捏造

こんにちは、菅俊一です。今回は、私たちの頭の中で行なわれる意味の生み出し方について考えたいと思います。手元に紙を用意して、直径5mmほどの黒く塗りつぶした円を描き、円の右側を1mmほど開けて4cmくらいの横線をまっすぐ引いてみましょう。描けたら、同じように少し下にまた別の円を同じ大きさで描き、右隣に今度は直線ではなく少しぐにゃぐにゃした線を引いてみましょう。



描いた図を見てみると、まっすぐの線はスムーズに動き、ぐにゃぐにゃした線はふらつきながらも進んでいる感じがするように、線を円の軌跡として解釈することができるのではないのでしょうか。せっかくなのでもう少し、先ほどと同じように丸を描いていろいろな線を引いてみましょう。直線によるジグザグや、跳ねるような曲線、何かを大きく避けるように湾曲した線など自由に考えて引いてみてください。円だけでなく、何かマグカップなど日用品の写真をスマートフォンなどで撮って、その写真の中に日用品のための痕跡を描き込んでもよいかもしれません。壁に跳ね返ったり段差を乗り越えたり、物を避けたりする線などいろいろ描くことができそうです。同じ円やモノに対して、線が違っただけでさまざまな動き

が見えてくるのではないかと思います。

“正しさ”の呪縛から逃れて想像を解放する

今回みなさんには、動かないモノの隣に線を描き、それを軌跡として捉えることによって、実際には動いていないものがさも動いたかのように思う、動き（のイメージ）を捏造するということをやってもらいました。私たちの頭は非常に柔軟なため、いろいろな線に応じた動きを想像することができます。しかし、それらの動きは何も線がないときに勝手に想像されることはなく、線が引かれたことではじめて「このような動きをしたように見る」という想像のフレームが定まり、動きが生まれているわけです。

ここで重要なのは、唯一絶対の正しい線が1つあるわけではなく、たくさんの解をいくらかでも生み出すことができるということです。現在の社会ではとにかく失敗のない安定的な答えを求められることが多いですが、想像の世界は基本的に自由で誰しもがたくさんの答えを生み出すことができます。

今回のワークショップは非常に単純な例ではありますが、想像を解放する訓練にはなるはずです。想像することは楽しく、自由で、いくらかでもできるという豊かさを、ぜひ実感するきっかけにしてみてください。▲

PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。